

実践報告

130番台から150番台の学生と土曜午後の英語

内野 信幸

日本福祉大学 全学教育センター

Remedial Education of English

Nobuyuki UCHINO

University Educational Center, Nihon Fukushi University

Keywords : pronunciation of alphabets, phonics, basic English grammar, mativation for learning

やった、やったぞ の声

見出しのことばは、4月に行った習熟度別クラス編成の際の試験 英語プレースメントテスト の回答用紙を返却した時に発せられた学生の声だ。この学生の合計点数の順位が 受験生153名中、153位 だった。

私が4月から担当する学生は、130番台から150番台の経済学部2クラス、そして社会福祉学部のいわゆる再履修クラスだ。

5月に行われた 経済学部英語教育意識調査 では、英語はどちらかという嫌い、大嫌い と回答した学生が8割強。短大、本学とおよそ30年近く英語の教員をやってきた私にはこうした数字は何ら驚きにはあたらない。かつて、若気の至りで「嫌いだったら、好きにさせてやる」などと考えたことがあったが、あまりにも傲慢な、流行りの言葉で言えば、「上から目線」では対応ができないことが分かりはじめた。むしろ、彼ら、彼女らの「ワカラナイ理由を冷静に分析して、対応策を考えること」が大切だと思うようになった。

さらに、簡単な、いわゆる中学校のことからやり直すにしても、大学では関連の研究成果を紹介し、使えるも

のは使うという態度が大切だと考えるようになった。加えて、嫌い、わからない、の背景には、学生の多くは「落ちこぼれ」ではなく、「落ちこぼし」にあってきたとも言える。

さて、経済学部のクラスでは、電車の週刊誌の中吊り広告にでていた「本当にあったバカダ大学」という、関東の大学で「アルファベットも書けない学生、そうした学生のために中学校のことからすることをやっている」大学もあるそうだと話をし、内心「うちの学生も似たような学生かもな」と思いながら、最初の授業、「中学校で習ったブロック体でアルファベットの小文字を書く」にはいる。いわゆる机間巡視をしていくとアルファベットの“a”を“ ”と書いたり、“g”を歪んだお供え餅のように書く者もいた。これまでに中・高の英語の教員からアルファベットの書き方の注意をうけたことも無いようだ。逆にミススペリングとしてマイナス点を付けられた経験もあったという学生もいた。アルファベットの書き方を大学で初めて注意された学生たちに、今度は次の課題に挑戦させる。

アルファベットの発音を書く

26文字を何とか終えて次の課題は、そのアルファベットの発音をカタカナでよいかからあらわしなさいだ。学生たちは不服そうに「エイ、ビー、シー……」と書いていく。そこで、「ちょっと待って」と言って、dogと板書して、「この単語を発音して下さい」と言い、発音をさせてみる。もちろんドッグとかえってくるから、「きみたちの書いたアルファベットの発音だとこれは、ディ、オウ、ジィ」じゃないのかと問う。

実は発音とスペリングの違いに私も中学生の頃悩んだ経験がある。本学の学生にもここがわからなかったために英語を諦めたという者もいた。アルファベットの発音ということが解らず、パニック状態になる学生もいるが、アルファベットの発音はエイ、ビー、シーではなく、それとは違った発音があることを“dog”の発音を例にした説明で、理解してくれる。そこで、アルファベットにはエイ、ビー、スィーという文字の呼び名とそれとは異なる発音とがある、とまとめて、アルファベットの発音をカタカナで良いから発音を書く作業を続けさせていく。その中で、英語の先生にカタカナでは英語発音は表せないと言われた学生もいると思うし、英語は耳からだとと言われてきたかも知れないが、英語も“world Englishes”と言われるようになってきているから、英米の発音を真似るなどというのは時代遅れになってきているし、耳から発音を身につけるとするのは母語・母国語の修得の場合であり、僕らが外国語として学ぶ場合はカタカナで原音に近い表現であらわすようにしていくことの方が、それこそ効率的だと話す。こうした入門期の実践については、「読んで訳す」英語の授業の克服——スキーマ理論と読みとり理論——（『日本福祉大学研究紀要』第81号・第2分冊～文化領域 1990年4月）と『新英語教育講座』（國弘正雄総監修 三友社出版、第2巻 1988年）に詳述しているのでそちらに譲る。とにかく、自ら英語の音を産み出す手立てをつくっておきたいというのが、授業の目的でもある。この発音に関する授業には英単語のつづりと発音との一定の法則性をまとめた、phonicsの理論がある。だが、この理論を説明するのは学生に学習への拒否感を生み出しかねない。学生が発音に困って教師の発音指導を待っている時に、当該の単語を分析して学生に発音させながらその単語のまとまった音を自ら発音できるようにさせていく。発音ができない単語は教師が発音を教えるという授業パ

ターンから学生を脱出させなくてはならないし、自分で英語の音を生み出せるのだということを実感してもらいたいからだ。

辞書ひき

学生の多くがなんとなく、英和辞書を引けば英語がわかると思いこんでいるが、私も編集委員のひとりとして執筆・編集に参加した高校英語コミュニケーション教科書JOYFUL（三友社出版 2010年）にも取り上げた

辞書ひきの項目を利用して出した課題が、A CAT DOGS A MOUSE.を訳してみようだ。子どもみたいな英語を出してと不満そうな、あるいは、ばかにするなといった反発心を顔に出す学生もいるから、「一匹の猫、犬たち、一匹の鼠」じゃ意味は通じないよ、それでは意味を持った訳文ではないぞと、簡単過ぎる、自分たちを馬鹿にしてと言いたげな学生の気持ちを払拭していく。ゆっくりと辞書を調べて、“dog”に動詞の役割があると気づいたら、よく気付いた！と大いに評価する。付属高校の生徒が電車の中で、試験前になると「辞書はひいたのだけど、ちゃんとした日本語にならない」とこぼしているのを耳にする。おそらく訳語の選択だけではなく、役割の選択、つまり品詞の選択をしていないから、的確な訳語も見つけられず、辞書の最初の訳語だけで訳そうとするから変な日本語訳になってしまうのではないかと思う。

「まともな日本語にならない」という感覚は優れているのだから、辞書ひきは訳語の決定だけではなく、品詞の決定も必要であるし、英文法の知識も役立てられることを身をもって経験してほしいと思う。辞書ひきも積極的な知的活動だ。授業中でも「辞書で調べなさい」などと教師が言わなくても進んで調べる姿勢を学生に確立させたい。また、知らない単語の意味を予想するのも楽しみになる。さらに、そうした活動が問題の解決や新たな解釈の誕生にもつながる可能性もある。catやdogにも擬人的な意味があることに辞書引きで気づき、新訳披露をする学生もかつて現れた。辞書引きの指導はなんとなく地味な感じだが、思わぬ効果的な授業展開にもつながっていく場面もあった。

先生、主語ってなんですか？

昨年の授業のときだったが、辞書ひきまで指導した後で、主語・述語動詞の語順に話をむけていこうとした時

に、小見出しにした質問が出された。耳を疑う質問に、小学校の国語の授業や中学の英語の授業で、「主語ということばを聞いた事がないか」と尋ねると、応えは否。文法用語を使うと難しくなるからと、教師たちが使わないようにしてきたのかもしれないと判断して、主語・述語の構造を日英比較、また、古い時代の英語では主語なくてもよかったんだ。そのかわり、今の英語以上に人称に合せて複雑に動詞の形を変えていかねばならなかったんだと英語史的な説明を、それこそ難しいと思わせないようにして、説明をするようにした。

この経験があるので、主・述の構造、語順については重要だと言うだけではなく、今日は君は魚は買わなくてよい という日本文の主語はどの語かな、と発問して主語を見つけさせて、主語の位置や主語が無くても意味が通じる日本語の特徴、特長にも気づかせる機会をもつようにした。「は」という助詞が手掛かりだが、例文のように「は」がつく語が主語 という常識では判断がつかない場合も多い。挙手をさせて主語を決定させていく。今日は には2名程度、君は は13名、魚は 4名程度だった。正解は「君は」だ！ に学生は大喜びをするが、答え合わせだけでは授業にならない。何故、君はが主語だといえるのかな と、再質問して、考える・友達同士の相談時間を与える。複数の学生を指名して、考えを出させる。「買う」という行動をするのは人間、「君は」です という見解がだされてくる。そこで、日本語の特徴は、動作・行動をあらわす言葉は文の最後の方にくることだ とまとめる。回りくどいやり方も知れないが、駅の近くで出会った学生から 先生の授業はわかりやすいからイイです と言ってもらえたが、学生がわからないことをそのまま放置せずに、些細な疑問にも応えるこちらの授業を理解してくれたからかそう言われたのかもしれない。

授業では出来るだけ多様な英文教材を準備して、主・述の構造に注目して、英文の内容を読む時には、日本語を学び始めたばかりの外国人の使う 私・行きます・映画館に という語順の変な日本語になっても良いから、英文を読み下ろして、その内容についてまず その英文が何を言っているのか自分の言葉でまとめることが大切だ と話す。したがって、私の試験問題では 辞書持ち込みは可 として、授業テキストから同じ英文を出す事などせずに、テーマ、トピックは同じものにするが、異なった問題英文を使うようにしている。英文を和訳させ

る出題形式もない。かつて専門課程の教員から鬼の首を獲ったかのように「まだ英語の先生は教科書の英文を和訳させるような古い授業をしているのですね」と英語教育批判を教授会で披瀝されたことがある。その時の事が私にはトラウマになっているのかも知れないが、ご批判者の指摘どおり、英語の試験は「和訳の暗記」というマイナス方向になってしまうのは私も避けたいと思ってきた。ちなみにこの批判に関しては「読んで訳す英語の授業の克服」というタイトルで1990年の本学『日本福祉大学研究紀要』に私見をまとめておいた。辞書を使って英文内容を読み取り、内容理解を進めて評価、批判するというのは私たち研究者でも行っていることなのだが、学生たちをもそれに近づけていくのは大学の英語教育としても必要な事だろう。英語試験の点数が高くなっても、そのような方向付けを身につけられれば、後で力も発揮されるのではないか、と思う。

自己PR文

昨年の経済学部英語クラスは英語嫌いで、いわゆる英語学力の足りない学生たちだった。

登校拒否の学生や高校を途中退学して大検で本学に入った学生、フィンランドに留学して、帰国後日本の受験制度についていけなくなってしまった学生、クラブのマネージャーとして活動する中で、学習が疎かになってしまったが、クラブ活動という自己推薦で本学に入学した健気な女子学生、漫画家志望ののだが、受験教育にはついていけなかった学生など。深刻な理由から、多様化された入学システムをうまく活用して入学してきた学生。自己卑下をする学生はいないようだったからこそ英語のクラスの雰囲気ははじめから開放的だった。しかし、英語がわからないという経済学部学生たちばかりだ。前述したような アルファベットの発音、辞書ひき、主・述を中心にした簡易英語文法指導と表現指導 で昨年も進めたのだが、後期に「英語プレゼンテーション大会」が経済学部として企画されていた。いわゆる学力不足だから、この大会には不参加を私の方は考えていた。しかし、学部担当の職員から「結構、参加すると学生にも自信がきますよ」と雑談の中で言われたことがあった。自信がもてると職員氏は何気なく言ったのかもしれないが、私の方は気になった。学生たちに「プレゼン大会に出てみるかい？」と聞くと、沈黙が続いた。その時に気づいたのが、彼、彼女らの 自己PR文 の面白さだった。

そのPR文のクラス内発表会では、「登校拒否を克服してくれたのが、ハードロックだった」とか「マジックに興味をもってしまったから、学業がおろそかになってしまったが、マジックには自信がある」と堂々と語った学生。マネージャーをしていた女子学生も級友の面倒をよくみてくれているし、授業への関心も高い。そこで、この学生たちの自己PRをもとに「プレゼン大会」に臨めばなんとかなると考えて、私の方が勝手に名付けた、ハードロッカー、マジシャン、マネージャー、フィンランディアンをクラス代表者にして大会まで3週間たらずの準備で臨んだ。

自己PRの英文原稿は授業の時と同じように丸暗記しなくても良いと伝えたが、学生たちは自分の責任で頭にいれようとしてくれた。本番では、マジックのネタはあったが、立派に英語で説明、演技もできた。ちなみに、上述の職員氏も「先生の人選は良かったですよ。僕らもみんな注目していた学生たちですよ」と言ってくれたが、大会後には「学ぶことへの変化も学生たちにあらわれて、単に遊び友達から次の知へのステップの第一歩を歩み始めてくれたようだ。そうなるとクラスの雰囲気も変わり、俺はダメなやつだからと自己卑下を「売り物」にしてきた学生も自らの「幼さ」に気が付き始めて、つぎの学年のゼミナールの選択にまじめに取り組むようになってくれた。そうでないと、クラスに居られないといった雰囲気になりつつあった。

今年度も学生自己PR英文に取り組ませた。学生の意識調査ではなくて、教員としては、授業内容を理解できたか否かが重要だから、アルファベットの発音についてと主・述の構造についての理解はできたかの2項目の調査をしてみた。最初の項目「英語発音」については以下のような感想が寄せられた。

- ・ 結構発音に気をつけたり、自分で勉強することが増えた。
- ・ 英文でみんなの前でスピーチをしたのは初めてでした。発音とかはまだなんだかわからないけれど何とか発表できて良かったです。
- ・ 単語の意味を自分で調べるようになり、自分で発音もできるようになってきた。

また、主・述の構造についてにも、

- ・ 主語に関係した述語を選ぶことができるようになった。

た。

- ・ わからない部分も先生にすぐに聞くのではなく、自分なりに辞書を引いて理解をふかめられるようになりました。

英語が苦手な学生でも、わかるようになる筋道が見えてくれば自信も湧いてくる。英語嫌いの経済学部 of 学生も、自信をもって学べるようになる。ちなみに、拙稿冒頭の「やったね」の学生も、前期末試験では60点以上の成果を出してくれたことを報告しておきたい。

土曜午後の英語 とは

この授業の公的名称は「社会福祉学部 フレッシュマンイングリッシュ2-2 . 2」という数字でおわかりいただけだと思うが、2年生を対象にしている。だが、内容は1年生英語の授業。早い話が、「1年生英語再履修クラス」で、授業日が土曜日3時限め。再履修という言葉があまりイメージが良くないし、週末土曜日でも何か楽しい気持ちでこちらも仕事にあたりたい。オシャレな雰囲気のある科目名はないかと考えて土曜日の新聞テレビ番組欄を見ながら思いついたのが、「土曜午後の英語」というクラス名だった。そういう名称にこだわったのも「再履修」という堅苦しい感じから、自由になり開放的なクラスになれば良い、そうした雰囲気が言葉の学習には効果的だと思ったからだ。授業の予定は経済学部のクラスとほぼ同じように進めた。

英語嫌いは経済学部ほど多くはなく、嫌いではないがよくわからない という意見も目立った。英語をしゃべりたい、海外旅行にも出かけて行きたいと夢を語る学生もいた。最初の授業で「何故、英語の授業でコケてしまったのか？」を聞いてみた。その理由が「初めの授業の日には、寝坊してしまったし、わざわざ土曜日に来るのが嫌だった」とか、「高校の英語の教師の教え方が嫌いだった」、「大学の授業ではこれが出来て当たり前という形で進めて行くのでわからなかったことが多かったです」というのがそれぞれの理由だった。二十数年ぶりの社会福祉学部のクラスだったが、最初に書いてもらった文章から、このクラスの学生たちは表現意欲が旺盛だと思われた。そこで、試験は形式的な筆記試験ではなく、英語エッセイを書くことにして、英語に自分の意見発表の場をつくっていこうとプランをたて、翌週に、学生たちにもその旨を伝えた。英文のエッセイの書き方はもち

ろん指導するから、今から日常の生活の中で題材をみつ
けるようにすごして欲しい、とも言っておいた。

英語で川柳

使用した教科書は、先の JOYFUL (三友社出版)。このテキストに 英語で川柳 という項目がある。そこで、川柳大会をすることにした。教科書の中で川柳の特徴である語数を示している個所を見つけてくださいと発問し 五七五 を見つけさせて、その上で季節を表す言葉を何と言うと発問して、「季語」を思い出させて、俳句と違い、川柳では季語も必要ないから語数だけ注意して日本語でまず川柳をつくってごらんと言った。そう話している途中で六つも川柳を書く学生も出てきた。さらに、川柳ではないが詩のようなものもでてきたので、英詩にしてごらんとその学生に言ったら、満面笑みを浮かべて詩でも良いのですかとやってきた。

それでは、学生の作品を紹介しよう。

- ・ Failure,
the thing that humanbeings
Can't be helped.
- ・ I love you
It can not say today also, either
Unrequired love. 努力賞
- ・ Thank you
great word
World is best.

色々な作品が出された。それぞれを机に並べて 最優秀賞 優秀賞 努力賞 を投票で選んでもらった。最優秀賞と優秀賞が同一得票だったのでともに優秀賞にして表彰式を行った。

優秀賞

You look around before raising your hand at majority vote.

多数決 周りを見て 手を上げる

I'm sleepy. 眠りたいな

I'm sleepy, But... 眠りたいけど...

I can't sleep. 眠れない

100円ショップで購入した「高価な商品」も表彰式では授与することにした。こうした経験が学生にはなかったようで、英語が嫌いだったが、川柳大会で優秀賞を手にした学生は嬉しさをこう伝えてくれた。

- ・ 私は英語が嫌いです。3か月、英語が嫌いなりに授業をうけてきて、まだ苦手なのは変わりませんが、前よりは、少しずつ英語が理解できるようになってきた気がします。自分で考えた英語の5・7・5が1位に選ばれたことはすごくうれしかったです。いままで英語で1位になれたことはなかったので、何か不思議な気持ちでした。それとともに少し英語が好きになった気がします。

そして、学生たちは、試験ではなく英語でエッセイを書くという最終課題にも決意を新たにしてい取り組む決意を示してくれている。

- ・ 2年前期で再りしゅうになったときはもうあきらめていました。でも、先生の英語のクラスになって、英語をほとんどはじめの方から学ぶことができてよかったです。安心しました。授業内容も耳にしっかり入ってきたし、レポートもこれまで学習してきたことを生かしたいと思います。
- ・ 英語は中学の時から一番苦手な教科です。だからエッセイなんて書けないと思ってました。でも辞書を調べたりしてなんとか書きました。エッセイのおかげで少しは英語を書く力もついたかなと思っています。これからも英語勉強続けるつもりです。

と気持ちを綴ってくれた。

わかることが原動力

海外旅行や研修に青年たちが関心を持たなくなったという傾向が1980年代から全国的にあらわれた。「英会話をやりたくなるような英語の授業をしていないからだ」と、4年前に本学で英語教育「改革」を主張した方の主張が、日本の青年たちの動向や、経済バブルの崩壊といったこともまったく無視した、ためにする薄っぺらい暴論

であったことはあきらかだ。大学の英語教育にあたっての現場の英語教師は、ブームとしての英語留学(?)や海外英語研修などイベントを学習動機にすることは、ほぼ意味がないと考えてきた。海外に行ったという一面的なとらえかたではなく、そうした研修や「留学」の成果を本当に意味あるものにするためにも、まずは英語の基礎的な学力を身につけさせることが何よりも重要で、さらに物事を批判的にとらえる、いわゆるクリティカルシンキングも大切になろう。研修や留学の本来の目的にも合致していくのではないだろうか。だから、英語がわかる力こそが、学生の学ぶということへの変化を引き起こす。土曜午後の英語の参加学生はこう述べてくれている。

- ・……初めは土曜日に英語のために学校に来るのがすごく苦痛でしたが、今は先生に英語のわからない所を聞いて、毎回すごく勉強している気がします。エッセイというものは生まれて初めておこなうもので、とても難しいですが、土曜午後の英語がなかったら一生行っていなかったと考えると、土曜日の英語があって良かったと思います。英語も大大大嫌いでしたが、今は以前ほど嫌いではなくなりました。……英語エッセイ提出日までに一生懸命エッセイががんばります。

この学生は、当初は欠席しがちだったが、5月連休明けからこの授業は皆勤だった。英語川柳に興味をもってくれたし、英語エッセイにも努力しようとしてくれた。世界を旅する夢をもっている学生も、最初は気持ちが伝われば良いと考えていたが、キチンと自分の考えや気持ちが伝わるようになっていきたい、そのためには基礎が大切だと言うようになってきた。

中・高6年間で英語をやってきたのだから、こんな単語や文法事項はわかっていると思って多くの大学英語教師は考えてきた。だが、実際の学生の多くはわからないことだらけで大学生になってきている。結局、「わからないこと」は「丸暗記でやれば良い」と判断してなんとかやってきているから、身につけてはいない。「わからないところが聞けて」と述べた学生は、英語の仮定法がわからなかったという。仮定法については、「仮定法過去、過去完了」と言った仮定法の説明に良くつかわれる文法用語を避けて、仮定法は「嘘つき用法」と言い、

“If I were a bird, I could fly to you.” だったら I were a bird は あり得ないから嘘だよ と伝えているわけだ、そう考えれば仮定法についても、時制をあえて古くすることで「嘘」を示すことになるわけだ、と説明をした。

英文法を説明して、英文を日本語訳で理解する、いわゆる Grammar Translation Method への批判によって文法指導をしなくなる教員もでてきて、その結果「主語・述語動詞」ということも教わず、「主語って何ですか」と尋ねる学生が現れたことはすでに述べた。三人称単数の主語の場合、現在形の動詞には (e) s がつくという英文法事項も、中学1年生で教えられることだが、日本語にはない法則だから身につかないのはやむを得ないことだ。私も中学生の時にこのいわゆる「三単現のs」に疑問を持った一人だ。中学の英語の先生からは「きまりだから覚えようね」と言われただけで、やっぱり英語は暗記なのかと学習の継続を諦めてしまった想い出がある。英語に対する疑問にも一定の説明がつくようになったのは、自宅近くの私塾で英語を教えるようになった時のこと。塾生から「なんで三単現にはsがつくんですか？」と質問を受けた時の事だ。この質問に、「それが英語の決まりだから」と自分が習った中学の英語教師のように応えたら、「学校の英語の先生と同じことは言わないでよ。僕らの疑問に答えてくれないと塾じゃないから」などと生意気なことを「のたまわれた」。塾生の訴えにも一理あると考え直して、英文法書では疑問の解決にならないから、どうしようかと困りながら自宅近くの行きつけの書店で売れ残った英語史の新書本の目次を追っていると、その本 アンドレ・クレパン著、西崎愛子訳『英語史』白水社、1970年の「動詞の屈折」の項目に載った「近代英語の直接法現在3人称単数の-sはノーサンブリアの方言から来たものであり」(アンドレ 87ページ) という一文にであった。この説明には小踊りしたい気持ちになったことは言うまでもない。塾生たちにも自慢げに「三単現のs」の説明したのを覚えている。

この三単現のsにまつわる塾生との経験は、中学の教師たちとともに作った中学生用の英語問題集『じょいふる英語 中学1年』(三友社出版 1984年)にも「古い英語の残りかす」と題して、子どもたちの何故に対応しようとしている(『じょいふる英語 中学1年』66ページ)。また、さらにアフリカ系アメリカ人作家のラング

ストン・ヒューズの「栄光のアメリカ（黒人）史」
Langston Hughes, *The Glory of Negro History* (1955) の日本人大学生向けのテキスト（南雲堂 1983年）の中でも、アフリカから奴隷として連れて来られたアフリカ人女性が、“Once when I were trying to clean the house like Old Miss tell me, I finds a biscuit. I's so hungry I eat it, 'cause we never see such a thing as a biscuit.....” (Hughes, p. 24), と主語の1人称の動詞に“s”をつけ、finds とすることも分った。3単現の(e)sの説明では、こうしたこともふくめて話を広げていく。中学校1年生で学んだことを「中1で習ったことなのだから、思い出しておくように」という注意のしかたもあるだろう。だが、それでは、ことばへの好奇心や気づきは生みだされない。英語圏の国々の歴史や英語史にも目を向けていくと様々な発見もある。また、日本語との比較も大切な学びの要素だ。学ぶ機会を上手く提供しながら、「わかる」筋道をたてることを主にして指導を行えば、学びの可能性は様々な方向にひろがっていくだろう。また、学校英語の再評価もはじめられており、大津由紀雄編著『学習英文法を見なおしたい』（研究社 2012年）も最近出版された。2011年9月に慶応義塾大学で開催された英語教育シンポジウム「学習文法——日本人にふさわしい英文法の姿を探る」と題したシンポの参加者とそこでの問題点を整理してまとめて、学校英文法への提言、さらにビジネス英語という観点もくわえられて、幅広い英文法のとらえ方が紹介されて興味深い。

小・中・高での英語教育と実践にも注意を向けて、大学の英語教育をどのように進めて行くかを考え、数年後に退職を迎えるまで、教育実践を深めていくつもりだ。ちなみに冒頭で紹介した経済学部の学生も、土曜午後の英語の受講生たちも、英語エッセイを書きあげて、単位を手にしたことも付記しておきたい。

引用・参考文献

- (1) 内野信幸、滝口優他編著『高校英語教科書 JOYFUL コミュニケーション英語基礎』（三友社出版 2012年）。
- (2) 大津由紀夫編著『学習英文法を見直したい』（研究社 2012年）。
- (3) 内野信幸「『読んで訳す』英語授業の克服 スキーマ理論と読みとり理論」『日本福祉大学研究紀要』第81号・第2分冊～文化領域（日本福大 1990年）。
- (4) 内野信幸「みずから学ぶ力をつけるスタートライン」『新英語教育講座』第2巻「入門期の指導」國弘正雄総監修、大浦暁生、小山内洸他監修（三友社出版 1988年）。

- (5) 内野信幸執筆・監修『じょいふる英語 中学1年』（三友社出版 1984年）。
- (6) アンドレ・クレパン 西崎愛子訳『英語史』（白水社 1970年）。